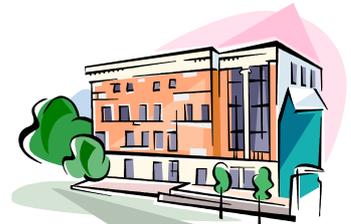


先進図書館見学記



先進図書館の現在

府中市立中央図書館、さいたま市立中央図書館、いわき市立総合図書館を見学してきた。この3館には、自動貸出機や自動返却機、予約図書受け渡しシステム、自動化書庫の導入など、新しい技術が導入されている。いっぽうで、大量の蔵書と専門職員によるレファレンスサービスや児童サービスなどに力を入れており、流行に流されない「標準的な図書館」でもある。

これら先進図書館のサービスのあり方を要約すると次のような見方ができるのではないと思われる。

1 ひとりで使いこなせる図書館

目指すところは利用者がひとりで使いこなせるような図書館である。案内サインは大きく、単純で、分かりやすい。たとえば書架の一番端に、大きな書架番号札をつけてあり、利用者はその番号を頼りに資料を探ることができる。特に開架書架の数が多い図書館では、書架の案内サインは重要である。

府中市では「予約図書受け渡しシステム」により、セルフサービスで予約図書を貸出する。貸出も自動貸出機により、返却も自動返却機を使って、ひとりでできるようになっている。

これらの「セルフサービス化」は、「ひとりで使いこなせる図書館」を目指したものである。

ただし、単に省力化のためのセルフサービスに終わり、「人間」の介在しない図書館、「人的支援のない図書館」となると、図書館それ自体の衰退を招くことが懸念される。



いわき市総合図書館

2 図書館員の専門性を引き出せる図書館

セルフサービス化により、図書館員が利用者と接する時間を長く持てるようになる、というのが基本的な考え方である。レファレンスサービスも懇切に、児童サービスでの「おはなし」や「読み聞かせ」なども頻度を増やすことができる。

開架冊数が30～40万ともなると、求める本を利用者がひとりで探すのは、時に非効率的である。ときには自分で、必要なときには気兼ねなく図書館員の力を借りる。それを使い分けたり、図書館の仕組みを踏まえて利用したりするのが「使いこなす」ということの中身ではないだろうか。

3 機械化の導入 自動化書庫

機械化の典型と思われるものは、自動化書庫である。自動化書庫により「省スペース」と「安全・快適な労働環境」を得ることができる。しかし、自動化書庫にはまだ欠点も多い。荷重は1㎡あたり3,000kgになるため、建物の躯体に影響を与えるのでその分建設コストが高く、ランニングコストも大きい。またシステムのエラーや故障が生じた場合、修理が完了するまで書庫内の資料は利用できない。書誌情報や請求記号などの明確な手がかりのない資料は探せない。除籍する場合に1点1点現物を確認し、類似資料と比較しながら行うことは不可能である。これらのことから導入は慎重な検討が必要である。しかし、府中、さいたま、いわき市とも自動化書庫の導入により、100万冊を超える収容能力を獲得した。

さいたま市のセルフ貸出機(左)とセルフ返却機(右)



4 ハイブリッド図書館への志向

活字資料とデジタル資料の両方を提供する図書館をハイブリッド図書館という。さいたま市ではインターネット専用機と商用データベース検索機を多数設置していた。午前9時にはいずれも7割を超える使用率であった。ハイブリッド図書館といわれるにはデジタル媒体資料がかなりの比重を占めなければならない。利用されることが先ず第一歩だが、技術革新はもっと早いスピードでハイブリッド図書館を招き寄せようとしている。

5 蔵書規模の拡大と広い開架室

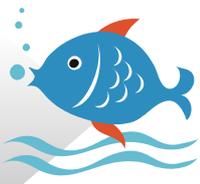
3館とも蔵書規模については、100万冊程度の規模である。40年くらいの収容能力を持っている。そして、どの図書館も開架室は広く、たくさんの書架を整然と並べ、蔵書の内容もバランスよく、専門書も収集している。これが最も大きな魅力である。

開架書架にある本は傷みも少なく、仕事の専門領域で必要とされるものもきちんと収集している。ということは図書購入費も比較的潤沢で、多くの新刊書を購入し、市民には大切に読まれているということである。

この3館は多少の欠点はあるとしてもコレクションの構築という点では、30年先50年先を見据えて収集・蓄積を行っている。今よりも30年先が楽しみになる図書館である。蔵書収容規模の拡大により、知的資産の次世代への継承が可能になるが、継承しなければならないのは蔵書だけではなく、その蔵書を蓄積・継承して行くコレクション構築能力である。

(本館：亀澤)

いちおしライフラリー「美味しい水」



現在の日本では、きれいでおいしく安全な「水」が身近にあることがあたりまえになっている反面、お店や自動販売機にはミネラルウォーターが大量に並んでいたりもします。「ミネラルウォーターはおいしい」「水道水は浄水器を通さないとまずくて飲めない」といった、水に対する自己流のこだわりを持っている人もたくさんいると思いますが、それは本当に正しい知識に基づいているものなのでしょうか。ちょっとでも自信がないと思った人にこそ、今回紹介する資料で正しい水知識を持っていただきたいと思います。

また環境問題という視点からも、河川の水質保全が重要視されています。是非この機会に身の周りの水環境を見直してみてください。



『おいしい水の科学』
佐藤 正 / 監修
日刊工業新聞社 2007

おいしい水とはどのような水か？この本では水の味をテーマに、水道水やミネラルウォーター、井戸水などを科学的に分析し、水が人間の身体にどのように関わってくるかを解説しています。科学的という言葉を使いましたが、難しく専門的なことが書かれているわけではなく、水に関するいろいろな雑学がおもしろくまとめられていて、誰でも最後まで楽しく読めるものになっています。



『新 富山の水環境』
富山県立大学工学部
環境工学科 / 編
TC 出版プロジェクト 2009

富山県立大学で教育・研究された、県内の水に関わる環境についての専門書です。自然を通して水が循環していく中で、どのように水環境を保全し活用していくかについて、いろいろな視点から分析されています。

その中の「富山のおいしい水」の項に県内の水道水についての解説があり、そこを読めば、県民が自慢できるほどおいしいといわれている富山の水の秘密がわかると思います。



『平成の名水百選』
日本の水をきれいにする会 / 編
ぎょうせい 2009

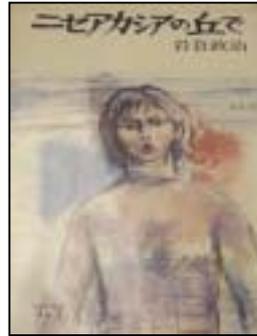
昭和 60 年に当時の環境庁が、身近な清澄な水であって、古くから地域住民の生活に馴染み、保全活動がなされてきたものを再発見し、広く国民に紹介することを目的に「名水百選」を選定・発表しました。選定から 20 数年、北海道洞爺湖サミットの開催に合わせ、水環境保全の推進を図るために新たに選ばれた全国各地の「名水」を紹介しています。

ちなみに富山市の「いたち川の水辺と清水」が紹介されていますので、興味を持たれた方はおいしい水を味わいに訪ねてみてはいかがでしょうか。（本館 新保）

岩倉政治文庫の資料 其の拾

昭和 11 年に結婚した後、岩倉夫妻は四人の子供に恵まれました。そのうち、次女の高子は女優、三女の麦子は布絵作家、長男の政城は歯科学者として、現在もそれぞれの道で活躍中です。しかし、残念なことに長女の塩子は、腎臓病のため、若くして亡くなりました。岩倉にとってもとりわけ辛いことだったので、彼女についての文章は、ほとんど残されていませんが、昭和 47 年発表の短篇「ニセアカシアの丘で」において、存命中の姿の一端がうかがえます。

この作品の舞台は、石川県内灘町です。内灘町は、米軍の砲弾試射場に対する抗議運動（いわゆる「内灘闘争」）の舞台として有名ですが、岩倉と塩子は、各々この運動に関係していました。



没後、塩子の遺骨の一部は、この地にひっそりと埋められたのですが、歳月を経て、岩倉が再び内灘を訪れたとき、開発のためにその場所は分からなくなっていました。

しかし岩倉は、むしろこれで良かったのだと考えます。娘は、その短い命をこの地で、燃やし尽くして逝ったのだから、と。哀切感に満ちた作品ですが、亡き愛娘への鎮魂歌として、重要な一篇と言えます。

（本館 舟山）

レファレンスあれこれ

今回は大山に関する質問をご紹介します

Q. 『剣岳・点の記』の映画に登場した山の案内人宇治長次郎について知りたい。

A. 宇治長次郎は明治 4 年、大山村和田(現富山市)に生まれました。昨年出版された「山案内人長次郎」(桂書房 2009)は、今までまとまった評伝のなかった長次郎について、その生涯と山案内にまつわる逸話が収められています。同著では、長次郎が人並みはずれた身体能力を持ち、人柄は温和で、優れた山案内人であったと紹介されています。また、「大山の歴史」(大山町 1990)には、「日本山岳風土記」所収の田辺重治の随筆「長次郎とその頃を語る」が収録されており、田辺からみた長次郎の人柄をうかがい知ることができます。

Q. 「越中七金山」と呼ばれた亀谷銀山について知りたい。

A. 亀谷銀山は、大山地区亀谷にあった銀山です。天正 6 年(1578)に初めて銀山が発見されて以来、江戸末期まで「亀谷かね山」としてその名が知れわたっていたことが「大山の歴史」(大山町 1990)にとりあげられています。また、「大山町史」(大山町 1964)、「ふるさと再発見」(大山町 2002)には、銀山の最盛期は慶長元年(1596)から元和 4 年(1618)頃までの 20 年余りで、多くの山師が活躍し、有数の鉱山街となったことが紹介されています。正保年間(1644 ~ 1646)には銀の産出が少なくなり、その後は静かな農村となりました。(大山 滝川)